

今日は3:13-3:18から「神に仕える者の幸い」と題して2つの点でみことばを取り次ぎます。

1. 不信仰な者の言葉 13-15

今日の箇所は、神と民との対話の最後の箇所です。今まで見てきたように、神の語りかけに対して、民は不信仰な応答をしてきました。今日の箇所は民の不信仰な言葉が頂点に達します。13「あなたがたのことばは、わたしに対して度を越している。—主は言われる—あなたがたは言う。『私たちが何と言ったというのですか』と。」神は、ご自分に対する民の言葉が、もはや限度を超え、度を越していると言われました。ところが民は「私たちが何と言ったというのですか」と言って、自分たちの度を越した言葉を自覚していません。

この民の言葉に対して神は言われました。14「あなたがたは言う。『神に仕えるのは無駄だ。神の戒めを守っても、万軍の主の前で悲しんで歩いても、何の得になろう。』」この人たちは、以前は神に仕えました。また神の戒めを守りました。万軍の主の前で悲しんで歩くとは、神の前に罪の悔い改めをしたということです。彼らは神のことばに応答し、自分の罪を悔い改めました。ところがそのようにしても、この世的な報いを受けることがないと感じたのです。そこで彼らは不信仰になり、「神に仕えるのは無駄だ。神の戒めを守っても、万軍の主の前で悲しんで歩いても、何の得になろう」と言って、神に仕えることも、戒めを守ることも、悔い改めることもやめてしまったのです。彼らはこの世の損得勘定で、神に仕えるか否かを決めました。彼らの信仰はご利益信仰でした。そして神を信じて、神のことばに従っても、神に仕えても、何の御利益も得ることができないので、信仰は何の得にもならない無駄なことだと、神に対する不満を言っていたのです。

さらに15節で続けて言いました。15「今、私たちは高ぶる者を幸せ者と言おう。悪を行っても栄え、神を試みても罰を免れる」と。高ぶる者とは、神に対して高ぶり、神を信じない者のことです。3:12では十分の一のささげ物をする者を神は祝福されるので、「すべての国々は、あなたがたを幸せ者と言うようになる」と神は言われました。しかし、不信仰な者はこの神の言葉に反発し、「今、私たちは高ぶる者を幸せ者と言おう」と言いました。なぜなら、彼らは「悪を行っても栄え、神を試みても罰を免れる」ではないかと言うのです。不信仰な民は2:17でも「悪を行う者もみな主の目にかなっている。主は彼らを喜ばれる。いったい、さばきの神はどこにいるのか」と言いました。

私たちも、キリスト教信仰をこの世のご利益宗教と同じものと考えたら、当時のイスラエルの不信仰な者と同じ言葉を神に言うことになるでしょう。イエスを救い主と信じたからと言って、お金持ちになるわけではありません。病気が癒されるわけでもありません。願い事がかなえられるわけでもありません。奉仕をしたから、献金をしたから、この世的なご利益を得るわけでもありません。そのように言うと、何のためにキリスト教を信じるのか、キリスト教信仰は無駄だ、何の得になろうということになるでしょう。

さらに目をこの世に向ければ、クリスチャンでない人がこの世で大いに栄えている現実を見て、彼らのほうが幸せ者だと思えるかもしれません。また悪を行っても、罰せられることなく栄えている姿を見れば、神を信じ、神のことばに従って生きることに意味を見出せないと思うかもしれません。しかし、本当にそうなのでしょうか。これが聖書が私たちに語る問いです。そしてその答えが今日の箇所の後半にあります。第2の点で見ていきましょう。

2. 神に仕える者の幸い 16-18

16a「そのとき、主を恐れる者たちが互いに語り合った。」不信仰な者が神に対して不平を言っていた時、神を恐れる者たちが互いに語り合いました。彼らは3:7の「わたしに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたに帰る」という神の招きに応えて、神を信じ、神を恐れ、神に仕える人たちです。彼らは共に集まり、互いに語り合いました。また共に礼拝し、共に交わり、共に奉仕しながら、互いに信仰を励まし合っていたのです。

このことは私たちにとっても大切です。私たちは日々、キリスト教信仰とは正反対のこの世の声を聞きながら、過ごしています。ですから、一人で信仰生活を過ごしていれば、信仰が弱くなり、この世と妥協し、不信仰な思いになっていく危険性があります。そのような誘惑から、自分自身を守り、信仰を成長していくためには、クリスチャン同士の交わりが必要なのです。共に神を礼拝し、みことばを聞き、祈り合い、交わりの中で互いに語り合い、共に奉仕する時、私たちの信仰は励まされます。そして、信仰は決して無駄ではなく、この世の損得勘定では計り知ることのできない、すばらしい祝福を神からいただいていることを知るので。

16b「主は耳を傾けて、これを聞かれた。」神は信仰者の交わりの中で語られることに耳を傾けて、聞いておられます。共に祈る祈りを、神は耳を傾けて聞いておられます。イエスはマタイ 18:19-20 で言われました。「まことにもう一度あなたがたに言います。あなたがたのうち二人が、どんなことでも地上で心をつにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。」

16c「主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちのために、主の前で記憶の書が記された。」マラキはここでこの世の終わりの神のさばきの日に人々の目を向けさせました。記憶の書とは、ダニエル 12:1 では「あの書」と呼ばれ、「しかしその時、あなたの民で、あの書に記されている者はみな救われる」とあります。また新約聖書では「いのちの書」と呼ばれます。黙示 21:27 にはこうあります。「しかし、すべての汚れたもの、忌まわしいことや偽りを行う者は、決して都に入れない。入ることができるのは、子羊のいのちの書に記されている者たちだけである。」マラキは「主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちの名前が記憶の書、即ちいのちの書に記された」と言いました。いのちの書に名が記される主を恐れる者は、救い主イエスによってすべての罪が赦され、天の御国に入る永遠の祝福を受けるのです。

17「彼らは、わたしのものとなる。一万軍の主は言われる—わたしが事を行う日に、わたしの宝となる。人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ。」いのちの書に名が記されている人は、神のものとされ、神の宝とされます。また父なる神は、イエスの救いに与り、神の子どものされたすべての人をあわれみ、永遠の都で神と共に生きるようにしていただきます。

18「あなたがたは再び、正しい人と悪しき者、神に仕える者と仕えない者の違いを見るようになる。」この世にあっては、目に見える形で神を信じる者と信じない者との違いがわからないかもしれません。むしろ、神を信じる者が苦しみにあい、神を信じない者はこの世的には栄えているかもしれません。けれども、この世の終わりにある神のさばきの日には、両者の違いをはっきりと見るようになるのです。神は正しい者、神に仕える者と悪しき者、神に仕えない者とをはっきりと区別して、正しいさばきを行われるのです。

私たちは、この世の損得勘定や価値基準で、神を信じ、神に仕えることが無駄なのか、有益なのかを判断してはいけません。そうではなく、永遠の御国に目を向けることが大切なのです。イエスは天の御国に私たちを招くために、この世に人として来てくださいました。そして、ご自分を信じる者が永遠のいのちを受け、永遠の御国の祝福に与るために、ご自分のいのちを十字架でささげてくださったのです。そして、三日目によみがえり、救いを成し遂げて天に帰り、再臨の時にいのちの書に名の記されている人たちを迎えに来てくださるのです。その時、私たちは天の御国で本当に幸せ者であることを実感することでしょう。

さらに主にある幸せは、天の御国に行くまでお預けなのではありません。天の御国の祝福を今この世にあって受けることができるのです。まず私たちの罪が赦され、罪の重荷から解放されます。そして神の子どもとなり、神と共に歩む人生が始まります。いつでもどこでも、神は私たちとともにいて、私たちを守り、導き、助けてくださいます。同じ神を恐れ、神に仕える者が集う教会の交わりを与えてくださり、その交わりの中で信仰を励まし合って生きることができます。試練の時にも脱出の道を備えてくださいます。

神が私たちのすべての必要を満たしてください。私たちの弱さのうちに現わされる主の恵みを十分に受けて生きることができます。また神の栄光を現すという人生の究極の意味と目的をもって充実した人生を歩むことができます。死に対する恐れがなくなり、天に帰る希望をもって、この世の人生を全うすることができます。そして最後には、永遠のいのちの祝福を天において完全に受け、永遠に神と共に生きる者とされるのです。

このような神の祝福を覚える時、私たちは「神に仕えるのは無駄だ。神の戒めを守っても、万軍の主の前で悲しんで歩いても、何の得になろう」と言うことはできません。むしろ、「神に仕えるのは何とすばらしいことか。神のことはを守り、悔い改めて、主の赦しをいただくことは何と幸いなことか」と言う者となります。そして、神のために苦しみを経験したとしても、それを幸いと思って生きる者となるのです。使徒たちがユダヤの最高法院で初めて鞭打たれた時、彼らはイエスに従って損をしたと言ったのでしょうか。そうではなく「御名のために辱めに値する者とされたことを喜びながら、最高法院から出て行った。そして毎日、宮や家でイエスがキリストであることを教え、宣べ伝えることをやめなかった」のです。その結果、神のことは増々広まって行き、イエスを信じて救われる人が非常に増えていきました。

クリスチャンになっても、試練にあったり、困難な状況に陥ることもあるでしょう。周りを見ると、クリスチャンでない人がほとんどであり、神を信じなくても幸せに生きていると思うかもしれません。そんな時には、神が私たちをどれほど祝福してくださるかに目を向けましょう。私たちは永遠の祝福を受けているのです。ですから、イエスのための苦労も神からの恵みとして受け止めることができます。神はそのひとり子イエスを私たちにお与えくださったほど私たちを愛してくださいました。このクリスマスの恵みを覚えて、神の愛に応え、私たちも自分を神にお献げしましょう。そして、神を信じ、神に仕えることがどんなに幸いであるかを証ししていきましょう。